日本経済新聞（夕刊）　2010年（平成22年）7月14日（水曜日）

人間発見

北里研究所 名誉理事長

大村（おおむら） 智（さとし）さん

研究を経営しよう ③

北里研究所で抗生物質の構造解明、評判に

米の大学へ留学、低給与でも待遇は客員教授

帰国前、日本での研究費を現地企業から獲得

東京理科大学の大学院修士課程を5年かけて修了した。普通は2年。「記録ではないか」と大村さんは言う。大学時代の恩師である丸田銓二朗氏がポストを用意してくれ、母校の山梨大学に戻って、研究者としてスタートを切った。結婚し家庭も持った。

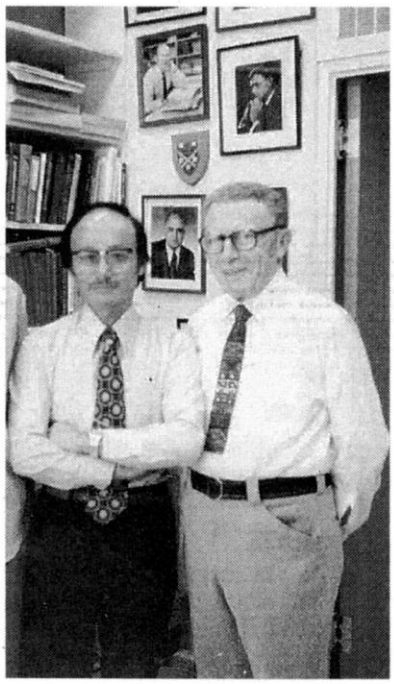
大学院時代の苦しいときには、クロスカントリースキーを思い浮かべました。今はちょうど、あの上り坂の苦しいときだ。もう少しで楽になると踏ん張れました。

山梨大では工学部発酵生産学科の加賀美元男先生の助手としてプランデーづくりを研究しました。このときが私と微生物の出合いでした。微生物の持つ能力に魅せられましたが、東京に比べて刺激が少ない。結局、2年ほどで退職し、北里研究所に転じました。

北里では小倉治夫教授の下で、抗生物質の構造決定を任されました。ロイコマイシンという有名な抗生物質がありますが、分子構造がわかっていませんでした。私が構造を明らかにしました。

故郷を振り切って出てきたからには後には引けないとの思いがあり、懸命に研究に取り組みました。ある冬の夜、近くの銭湯から帰宅すると、手にしていたタオルが棒のように凍っていました。夢中で考え事をして近所を歩き回っていたからです。そんな調子ですから、とうとう体調を崩し精神科の医師に診てもらいました。「仕事のやり過ぎだから気分転換にゴルフでもしたらどうか」と言われてゴルフを始め、今も続けています。

北里に構造決定の大村あり。数年するうちに、そんな評判が生まれた。当時、日本抗生物質学術協議会で常務理事を務めていた八木沢行正氏の目にとまり、1971年にカナダで開く国際会議に参加。米国の有力大学を訪問する機会を与えられる。



米国留学時代に恩師のティシュラー先生と

帰国してから、訪問で知り合った大学教授の方々に手紙を書いて留学を打診しました。みなさんから返事をもらいましたが、一番低い給与を示されたのが、ウエスレーヤン大学（コネティカット州）のティシュラー先生の電報でした。給与は低い代わりに、客員教授の待遇でした。

妻の芙視子（ふみこ）は不安を口にしましたが、そこを選んだのは正解でした。教授ですから、個室もありキャンパス内に宿舎も用意されます。何よりすばらしいことに、そのころ米国化学会の会長だったティシュラー先生を米国中のトップクラスの研究者が訪れます。私は先生の同僚として紹介され、居ながらにして知己を得られました。

学会の仕事で忙しい先生は自身の研究資金を使い、学生を私の研究室で指導してほしいと言われました。有力な地位にいながらも、飾らないやさしい方でした。一歩下がれば奈落の底と思って働いていたころを思えば、本当に恵まれた研究環境でした。

北里にいるころから、大村さんは微生物探索に仕事の領域を広げていた。「だれかが見つけた物質の構造を解明するより意義が大きいと思った」と言う。米国でも有用な物質をつくる新しい分野を研究した。しかし、滞在1年半ほどにして、帰国の要請が届く。

そのころ北里研究所の所長を務めておられた水之江公英先生から手紙が届きました。どうも「日本に帰らず米国にずっといたい」と私が漏らした言葉が人づてに伝わったらしい。帰らないわけにはいかないと思いました。しかし帰国してしまえば、米国に比べると、研究費はないも同然です。そこで研究費を米国で獲得して帰ろうと思いました。ファイザーなど有力製薬会社に共同研究を申し込み、資金援助を依頼すると、どこも色よい返事をくれました。

さらにティシュラー先生が聞きつけ、メルクを推薦し橋渡しをしてくれました。先生は大学に転じる前にメルクの研究所長でした。研究内容は帰国後に詰めることにして、年8万ドルを向こう3年間提供してくれることになったのです。70年代前半の8万ドルはそのころ2400万円くらい。日本では破格の額でしたし、まだ企業との共同研究に向けられる目は温かいとはいえない時代でした。

（聞き手は編集委員　滝順一）